



南の光明

The Catholic Diocese of Naha Newsletter

今年の教区の目標

求めよう、神のちむがなさを！
守ろう、沖縄における人権を！
探そう、真の平和への道を！

〒902-0067 那覇市安里3-7-2
カトリック那覇教区本部
TEL.098-863-2020 FAX.098-863-8474
発行人 W.F.バートン司教 1部40円
<http://www.naha.catholic.jp/>

(1) 2019年9月1日 (毎月1日発行) カトリック那覇教区報 MINAMI NO KŌMYŌ 第730号 (9月号)

2019年 第52回 那覇教区 サマーキャンプ

子供たちの信仰教育と 楽しい学びの機会です

キャンプ長 ヨアキム・ホアイ神父



日本全国で沖縄地方が一番早く梅雨と夏の到来を迎えます。梅雨が終わると、気温がだんだん暑くなり夏になります。那覇教区

は一つの家族としてすべての子供達をよく育てたいです。例えば、夏休みの間子供達はどこで遊ばせることができるか。信仰の教育はどうしようとか、どうやって全教区の青少年達が互いに出会うことができるか、など考えていました。その目的のために、一九六八年から、毎年サマーキャンプが行われてきました。今年も神様の恵みと皆さんの祈りと協力のうちに第五十二回サマーキャンプが開催されました。

カトリック信者として私達はだれでもイエス様に出会い、日々の生活の中で特に困難や問題がある時、イエス様のもとに行って祈りたいと信じています。この考えをもって青年達とシスター方と神父様方と一緒に考えて、「出会いにいられたイエス様『主の祈り』を唱えよう」というテーマを選んでプログラムを作りました。

参加する子供達が祈りの意味を理解し、イエス様に出会えることが私達の希望です。

の間、三十五名のヘルパー(青年達、福岡コレジオの三名の神学生、シスター方と司祭達を含む)



今年サマーキャンプは七十八名の子供達が参加しました。

その内小学生は四十六名、中学生と高校生は三十二名でした。一週間

は一緒に協力してくれました。小学生のキャンプ時はいいお天気でした。子供達はプログラム通りの楽しい活動：アウトドアゲームや海水浴やキャンプファイヤーなど、そして、ごミサと勉強のワークなどすべてが出来たので喜んでいました。しかし中学生の二日目の午後大雨と嵐のような強い風が突然吹きました。三張りのテントは倒れて壊れました。しかしながら参加者達とヘルパー達皆が互いに手伝って無事にキャンプ

の最後の日まで過ごしました。神に感謝致します！

私は今年初めてキャンプの責任者に任命されました。まだ経験があまりありませんので皆さんの心配と欠点がありました。けれども、サマーキャンプは一人の力ではなく、神様の見守りと、教区の皆様方の力を合わせてこの大切な活動を無事に終わることができました。

この機会に私は皆さんに感謝を申し上げます。

まず、ウエイン司教様をはじめ、押川司教様、神父の方々とシスターの方にたくさんのお世話になりました。毎日お祈りと子供たちに関心を持って来られ、ごミサを捧げてくれました。特にカプチン会のクレーバー神父様はサマーキャンプ準備からいつも助言と講話で協力くださいました。参加者と私達ヘルパーはその方々に大変励まされました。心から感謝申し上げます。

更に、小教区の方々が大掃除とテント設置や片付けをしてくださいました。教区の女性の会の方々が愛を込めて毎日おいしい食事を作ってくれました。皆さんの熱心なご協力のおかげで私達は安心してキャンプを行うことができました。(次項へ続く)



イエスの平和とは どんな平和だろう

ボスコ・ティン神父
名護教会 主任司祭



「あなたがたはわたしに地上に平和をもたらすために来たと思ふのか。言っておくが、むしろ分裂だ(ルカ十二・51)。

あるとき、イエスは、平和ではなく分裂をもたらすために来た、と強く激しい言葉で言いました。

私たちはイエスが神の平和であり、そして、イエスが地上に來られたのは平和を与えるためだと思つています。イエスのご誕生のときに、天使たちは歌を歌いました。「いと高きところに

は栄光、神にあれ、地には平和、御心に適う人であれ(ルカ二・14)。また、私たちも 毎週の日曜日、ごミサに参加するたびに、栄光の賛歌を歌っています。「いと高きところには神に栄光、地には善意の人に平和あれ」。そして、お互いに「主の平和！」とあいさつします。

さて、どうして、イエスは「あなたがたは、わたしが地上に平和をもたらすために来たと思うのか。言っておくが、むしろ分裂だ」と言っているのでしょうか。

このイエスのことばの中で、平和と分裂はどのような意味かを考えてみましょう。

ここで言う平和とは、単に平穩無事な状態という意味です。そして、イエスのメッセージは、人々に神の国を受け入れるか否かの決断を迫るので、必然的に分裂が起こるという意味です。私たちは分裂のことはよく分かりますね。イエスは続けて、次のように言っています。「一つの家に五人いるならば、三人は、二人と、二人は三人と対立して別れるからである。父は子と、子は父と、母は娘と娘は母と、しゅうとめは嫁と、嫁はしゅうとめと対立して分かれる」(ルカ十二・52-53)。そこには、皆が争っていて、平穩無事な状態がありません。

「地には善意の人に平和あれ」と「地には、御心に適う人へ平和あれ」、どちらが正しいですか。どちらもいいですが、今、教会では、「地には、御心に適う人へ平和あれ」に決定しました。ちなみに、神が、地には、御心に適う人へ平和を与えています。善意の人が平和を受けることができます。

別の例をあげると、現在、香港では、大学生たちと警察が対立していて、平穩無事な状態はいえませんが、イエスの言われ

イエスが復活されたとき、弟子たちに「あなたがたに平和があるように」と言われました(ヨハネ二十・19)。イエスの平和はこの平和なのです。つまり、イエスの平和は、心にある平和なのです。

実際に、家族と社会と教会の中で、分裂はあったが、イエスが來られたのは、地上に火を投ずること、すなわち、聖霊の火、愛の火を与えるためです。そしてその火がすでに燃えていることを、心から望んでおられるのです。もし、皆に聖霊の火、愛の火があれば、イエスの平和がそこにあるのです。人にはいろいろな意見があり、人生観は一人一人違っていますが、イエスの平和は愛の火なのです。

カトリック教会は、第二バチカン公会議の後、そのことを行いました。昔、カトリック教会はすべての宗教の中で一番の教会と言いましたので、ほかの宗教といろいろな面でも争いました。今では全ての宗教が平等と考え、ほかの宗教と対話するようになっていきます。カトリック教会は全ての宗教を尊重している中で、宗教間の争いがないのです。

イエスがこの平和を地上にもたらすのです。そして、神はカトリック教会を通して、その平和を世界に与えたいのです。また、神は私たち一人一人がいるいろいろな人と出会い、協力し合うとき、その「平和の火」を与えたいのです。

私たちは人々と全ての宗教を尊重しなければなりません。そして、どこに行っても、どこに住んでいても、どこで働いていても、分裂ではなく、愛の火を燃やしましょう。そうすれば、皆でイエスの平和を受けることができます。ですから、イエスの平和は愛の火なのです。

ありがとうございます。そして教区事務所の方々、ミッションピーチ管理の方、小教区のサマーキャンプ担当者や信徒の皆さん、たくさんのお祈りとご協力をいただきありがとうございます。感謝申し上げます。

最後にスタッフとヘルパーの皆さん、四ヶ月間サマーキャンプのために、皆さんと一緒に働いてとても安心と幸せな気持ちでした。いつでも連絡や相談ができるし、互いに違いを超えて困難を解決できましたので私は担当司祭として本当に嬉しかったです。お疲れさまでした！これからも互いに霊的生活を励まし合って、一緒に那覇教区の子供を教育し、来年二〇二〇の第五十三回のサマーキャンプに向かつて準備しましょう。

皆さんの限りないお祈りとご協力のおかげで今年のサマーキャンプを無事終了することができました。心から感謝申し上げます。神が皆さんを祝福してくださいませよう！

2019 SUMMER CAMP WORDS OF GRATITUDE!!

By: Fr. Joachim Hoai - Maehara Catholic Church

I believe that as a united family under the care of Bishop Wayne, our diocese aims to carry out for the betterment of our Christian life. One of them is to help the children grow up with spiritual experiences and obtain mutual brotherhood among them as much as possible. That is why since 1968, Naha Diocese has constantly organized Summer Camp for the children.

This year, with the protection of God and the help of all members of our diocese, we successfully made the 52nd Camp. In order to help the children to be accustomed in praying and living with God, the theme: "To meet us, Jesus came into this World - Let us pray [Our Father]!" was chosen.

There were 78 children participated in this Summer Camp - 46 elementary students, 32 junior and senior high school students. During the event a total of 35 helpers (the youth, seminarians from Fukuoka, sisters and priests), all together helped the children to have a joyful and memorable camp.

As the director of the camp, I would like to express my sincere thanks to all: first of all, to the Lord, Who loves and protected us, especially the children all throughout the camp. My gratitude goes to Bishop Wayne for his great love and care. Bishop was very busy but he came to visit us every day during the camp. Bishop presence relatively showed to the children the image of "To meet us, Jesus came to this World".

I would like to thank Bishop Oshikawa, all priests and sisters in our Diocese for their prayers and constant help from preparation to the camp itself. I would like to thank the Dominican sisters for lending us the tents of Okinawa Catholic School. All tents are new and the same size, therefore it was easy for us to settle and clean up. I hope that from now on, every year we can borrow the tents of Okinawa Catholic School for the Summer Camp. I also thank all the Sisters of different Congregations in Naha Diocese, especially Sr. Miyagi, who has encouraged and constantly helped us in this activity. I also would like to extend my gratitude to all the staff of the Chancery office and the Catholic Women's Association. All together, they worked hard to make the camp more fruitful - from health care insurance to a delicious meal for us every day.

Finally, I would like to congratulate and thank all the helpers and staff members! They are so wonderful in many ways to make the camp go through, even though we encountered heavy rain and strong wind. Working together with them in this event, I realized and treasured their values of group work, respect and solidarity in making decisions. As the leader of the camp, I learned many things and have many experiences in this Summer Camp. I hope that we can keep these values and spirit to strengthen our Catholic youth in our diocese from now on; we are also looking forward to the next Summer Camp of year 2020!

Once again, am thanking all of you for your endless prayers and sacrifices to support and made this event meaningful and fruitful for all the children in our diocese. May God bless us all!



「福音宣教のための特訓月間」(二〇一九年一〇月)



教皇フランシスコ

はじめに

カトリック教会は、毎年十月の最後から二番目の主日を、「世界宣教の日」と定めています。教皇フランシスコは、今年の十月を、「福音宣教のための特別月間」とすることを宣言されました。この特別月間は、今から一〇〇年前、悲劇的な大戦後の一九一九年に当時の教皇ベネディクト十五世が「諸国民への宣教」を強調した使徒的書簡「マキムム・イルド」と関連しています。ここでは、「聖なる生活と善行を通して、主イエスをより広く告知し、イエスの愛を広めること」が宣教活動の目的であることが説かれていきます。そこで、教皇フランシスコは、全世界の教会が「喜びを特

徴とする福音宣教の新しい旅の段階」に向かっていくよう呼びかけています。日本の教会は、教皇と福音宣教の呼びかけに応えて、次に提示する事例を参考にしながら、創造的な取り組みを始めていきたいと思います。

① 福音宣教をする教会の魂

教皇フランシスコは「福音の喜び」の中で、聖霊降臨の出来事を思い起こし、聖霊こそが、「福音宣教をする教会の魂」であり、「聖霊の働きに對し恐れることなく自らを開いていく福音宣教者」となるために、日々、聖霊に祈ることを薦めておられます。

この度、「ともに喜びをもつて福音を伝えるための祈り」を作りしました。地元の観想修道会の兄弟姉妹の協力を願いつつ、全教区で、祈りによって宣教活動を支えていきましょう。

② イエスと出会い、ともに出向いていく

福音宣教の第一の動機、それはわたしたちが受けているイエスからの愛です。イエスの愛を受け、その救いの喜びに生かされるために、わたしたちは、秘跡、とくにミサにおけるイエスとの人格的な出会いの恵みを大切にしましょう。また、聖書通読、みことばの分かち合い、黙想会、聖体礼拝、聖体訪問なども、そのための有益な助けです。

さらに、イエスとの人格的な出会いの喜びを、日常生活の中で神と隣人への愛として広げていくために、わたしたちは出向いて社会の福音化に奉仕します。今日の日本の文化や社会の中には、すでに福音的な芽生えもありますが、多くの人々を弱い立場に追いやり、抑圧、差別している現実もあります。キリストの力でこの芽生えを育て、全ての人を大切に社会と文化に変革する福音の担い手になりましょう。

③ 殉教者や聖人の生き方について

聖フランシスコ・ザビエルによって福音の種が蒔かれてから今日に至る歴史の中で、日本の教会は、日本二十六聖人殉教者をはじめ、聖トマス西と十五殉教者、日本二〇五殉教者、福者ベトロ岐部司祭と一八七殉教者、福者ユスト高山右近殉教者という数多くの模範を、「信仰の礎」としていただいています。

また、これらの殉教者の信仰を受け継ぎ、浦上四番崩れ(二八七年)に端を発する明治初期のさらなる迫害によって、西日本の二十二か所に流配され、信教の自由のために命をささげた人々もいました。彼らの中で、津和野の証し人三十七名の列福に向けた動きも始まっています。

また、第二次世界大戦前後の困難の中で、宣教のために力を尽くした聖マキシミアノ・マリア・コルベ司祭、尊者であるチマツチ司祭や北原恰子さんの生き方は勇気を与えています。日本の教会にとって、彼らの信仰の模範は、弱い人間を支える神のいつくしみと力を示す優れた証しです。

このような列聖・列福された

聖人や殉教者、そして尊者の他に、とりわけ二五〇年にも及ぶ禁教時代に互いに支え合って信仰を伝えた名もなき先達の信仰にならい、彼らをわたしたちの宣教活動の模範と励みといたしましょう。

④ 「諸国民の宣教」に関する研究や養成

第二バチカン公会議後の文書や教皇パウロ六世の使徒的勸告「福音宣教」(一九七五年)の精神を土台にして、かつて、日本の教会で行われた「福音宣教推進全国会議」(一九八七年)・II(一九九三年)の提言を再読し、それ以降の宣教活動のあり方を振り返ることも有益です。

同時に、わたしたちが現在置かれている文化、歴史、社会などの背景を考慮しながら、新しい視点で、日本人々にキリスト教の救いの意味をどのように解き明かすことができるのかについて、ともに考え、分かち合ひましょう。

また、司祭や修道者の召命を促進し、信徒の宣教者、カテキスタ、教会学校のリーダーなどの養成にも力を注ぎつつ、「一人ひとりが宣教者である」という意識を深めましょう。

たて軸よこ軸

信仰とは

普天間教会 石原愛玲夏

「信仰とは」という質問に対し、何か宗教を信じている者であれば、答えることができる方は多数おられると思う。しかし、私は答えることができない。この質問に答えられるというところが、私たち信者にとつての一生の課題であると、私は考える。「信仰とは」という質問の答えは、人それぞれ違うもので、その答えにたどり着く過程は多岐にわたると思われる。結局、その答えは一つしかないと思うが、考え続けることは大事だと思う。

その答えを見つける過程において、「これが私の答えなんだ」と決めつけてしまえば、それは「考えるのをやめた」とになり、その答えを見つげ出すことからは「逃げた」ことになる。追及を重ねるほど、「迷い」は生じるが、答えの「質」はより深くなる。そして、これこそが、神様から与えられた試練ではないだろうか。

色々と偉そうなことを書いてきたが、冒頭に書いた通り、私もまだ答えが出ない。それどころか、最近まで何も考えることなく、ただ教会に来て、ただ侍者をしていただけである。そんなことでは、答えをみつげることがあるか、「信仰とは」という質問が存在することさえ、気づかな

かっただろう。

私がこの質問について考え始めたのは、ミサの中の些細な出来事からである。いつものように祭壇に立っていた私は、聖歌を大声で歌っていた。私は、歌を歌うことが好きで、周りの声小さくても、気にせず大声で歌う。そのことを神父様に褒められたのである。好きなことを嬉しく、「神父様が喜んでくれるなら」と思い、より大声で聖歌を歌うようになった。このとき私は「神父様が喜んでくれることは、神様が喜んでくれることでもあるのではないか」と思い、これからは神父様の喜ぶ事をしようと思いついた。これが、私が「信仰」を意識したきっかけである。このときの私は、私が思う「神様が喜ぶこと」をしようと思いついた。これこそが私の答えだ、と思いついたのである。そんな私をシスターの一言が変えた。

その当時、私は進路について悩んでいた。一人では抱えきれないほどに限界を超えていた。シスターと話をしているうち

でくれることは、神様が喜んでくれることでもあるのではないかと、これからは神父様の喜ぶ事をしようと思いついた。これが、私が「信仰」を意識したきっかけである。このときの私は、私が思う「神様が喜ぶこと」をしようと思いついた。これこそが私の答えだ、と思いついたのである。そんな私をシスターの一言が変えた。その当時、私は進路について悩んでいた。一人では抱えきれないほどに限界を超えていた。シスターと話をしているうち

に、突拍子もなく泣き崩れてしまったのである。シスターは、「神様の意思に従いなさい。」と言った。驚くべきことに、この一言で、私はシスターの言わんとしていることを理解した。

自分自身の心の奥底、邪念を捨ててこそ見える自分の意思こそが神様の意思であり、神様との「対話」を通してそれと向き合うことができるのだということ。そして、私はこのことと同時に、「神様との対話を通して自分自身と向き合う場所」それが「教会」であることも分かった。それまでは、ただ侍者をするために来て、日ごろの疲れを癒してもらおう、という無責任な気持ちで教会へ行っていたかと思うと、とても恥ずかしい。

このような出来事を通して、「信仰とは」という質問の答えについて考える機会が与えられたのだが、この質問にはたくさんのお問があるのだと思う。例えば、前述の「教会とは」という質問がそうだ。神様から与えられる試練の先々に出てくる小問に答えてこそ、大問である「信仰とは」という質問の答えに近づけるのだ。

これからも更新が続けられていくと思うが現時点での私の「信仰とは」という質問に対する答えは、「神様の意思と向き合い、従う」ことである。

⑤ 宣教活動に従事するキリスト者の支援や国内外の災害復興支援

宣教のために助け合った初代教会の信者たちの模範(使徒言行録二・43-47)を思い起こしながら、世界の教会とともに、国境や地域を越えて宣教活動に従事するキリスト者を、祈りや献金などによって支援しましょう。「日本カトリック信徒宣教者会」の活動への支援、また「世界宣教の日」、「宣教地召命促進の日」、「世界こども助け合いの日」などに毎年行われている祈りや献金は、教皇庁宣教事業を支える手段となっています。

また、日本の教会全体を挙げて取り組んできた、東日本大震災やその他の自然災害からの復興支援と被災者への祈りを、これからも続けてまいります。

結び

教皇フランシスコは二〇一九年十一月に日本を訪問する意向を示されています。わたしたちは、教皇の訪日を日本の教会に向けられた「神の恵みの風」とうけとめ、「全世界に行って福音をのべ伝えなさい」(マルコ16・15)というキリストの呼

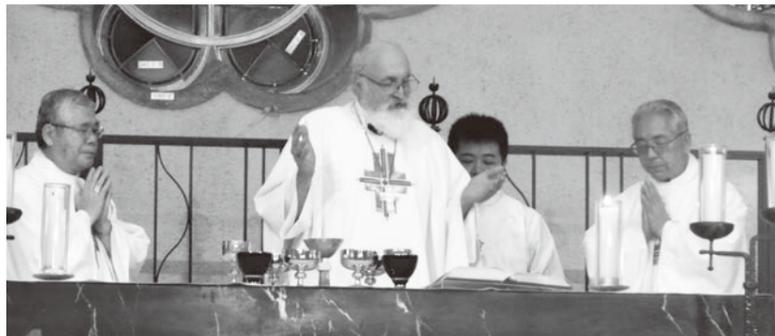
びかけに添えて、「新たな熱意、手段、表現をもって」、絶えず全力で福音宣教に取り組み決意を新たにしたいと思います。

ともに喜びをもって福音を伝えるための祈り

喜びの源である神よ、あなたは、御子キリストを遣わし、その受難と復活を通して、救いに導く喜びの福音をこの世にもたらしてくださいました。

また、あなたは、キリストの後に従う働き手を通して、諸国民の民に福音を告げ知らせ、どんな逆境にあつても、キリストを信じる人々の喜びを支えてくださいました。さまざま困難に直面している現代社会の中で、人々の救いに奉仕する教会を顧みてください。

キリストの救いの喜びを新たな熱意、手段、表現をもって伝えることができるよう、わたしたちを聖霊によって強めてください。わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン。



八月五日〜六日、広島教区の平和行事に参加することが出来たが、まるで沖繩での行事ではないかと思うほど沖繩が取り上げられていて感激だった。

平和の糸をつむぐ
— 広島教区平和行事 —

山田圭吾

「声」
角笛

「平和の糸をつむぐための教会の役割を振り返る」パネルディスカッションでは、「キリストの教えに基づく平和」（勝谷司教）、「ヨハネパウロ二世教皇来日以来の日本の教会の動き」（松浦司教）が話され、「具体的な話として沖繩の問題」についてウエイン司教がユーモアを交えながらも詳しく徹しく沖繩のことを伝えておられた。

分科会の一つは「沖繩はいま」わたしにもできること」で、メッセージシンガー会沢芽美さんが、北海道から移り住んだ沖繩（読谷村）で活動する意味を伝え、齋木登茂子さん（東京教区）は沖繩から離れていても沖繩と連帯してできる活動の方法等を話し、ウエイン司教はアメリカ人としてのアイデンティティーを大事にしながら、宣教師として、司教（司祭）として、沖繩の人々と共に生きる覚悟等について話しておられた。

その後、原爆供養塔から世界平和記念聖堂までの平和行進には若者も多く参加していて、沖繩からは聖公会の方々顔も見えていた。

夜の平和祈願ミサはウエイン司教の司式で全国から集まった十四人の司教と多くの司祭団に

よって荘厳に捧げられた。ウチナーグチの共同祈願があり、「意味は分からないけど何となくいい感じがした」という声があり、嬉しく思ったものだった。



分科会で。左から齋木登茂子さん、会沢芽美さん、ウエイン司教

六日の朝には「原爆・すべての戦争犠牲者追悼ミサ」が捧げられたが、開始前に高校生によつて、ヨハネパウロ二世教皇来日の際の「平和アピール」が朗読され、改めて「戦争は人間

のしわざ、平和は正義のわざ」について振り返る機会となった。続いて会沢芽美さんによる歌とお話し、そして一人芝居「もう一つの戦争—こどもを棄てる母」が上演され、我が子を殺さざるを得ない状況に追い込まれる戦争の悲惨さを思い起こし、涙を拭く参加者の姿があった。

また、並行して沖繩の絵本を紹介するコーナーや「沖繩の今」を伝える写真展もあり、行事参加者には沖繩で何度もお会いした方も多く、沖繩のために祈り、活動してくださる方々が各地におられることに励まされたものだった。

（泡瀬教区）

教区 NEWS 教会
司教訪問

今年の年頭の挨拶で、ウエイン司教は次のように述べられていた。今年の教区の目標は何かがでしょうか？この目標について深めあうため、那覇教区の皆さんのご協力を賜りたいと思います。新年度の司教公式訪問の際には、各教会でこの目標について皆さんと積極的に分かち合いたいと考えています。また、拡大司祭・助祭会議や信徒評議



7月例会の報告

どうして戦前のカトリック教会は戦争協力の道に走ったのか？

上智大学生神社参拝拒否事件

1932から35年にかけて、陸軍によるカトリック弾圧が行われました。上智大学生神社参拝拒否事件、奄美大島のカトリック排撃。二つの事件は陸軍が計画的に行っていたことが最近明らかになりました。^(注1)

上智大学生神社参拝拒否事件は陸軍のでっち上げの可能性が高いようです。しかし、配属将校引き上げという陸軍の通知(32年5月)で大学は存亡の危機に立たされます。^(注2)

解決のために、シャンボン東京大司教は鳩山文部大臣と交渉し、9月に次のような回答を得ました。「學生生徒兒童等ノ神社ニ参拝セシムルハ教育上ノ理由ニ基ツクモノニシテ此ノ場合ニ學生生徒兒童ノ團體力要求セラルハ、敬禮ハ愛國心ト忠誠トヲ現ハスモノニ外ナラス」大学、文部省はこれで解決と考えましたが、陸軍は引き下がりません。11月に配属将校を引き上げました。

33年6月、やむなく上智大学は科目、教授陣を国策に沿ったものに変え、弁明書を提出して将校の配属を願いました。軍部に屈服して教育方針を転換したのです。11月になって将校が配属され、ようやく大学は存亡の危機を脱したのです。

奄美大島のカトリック排撃運動

続いて陸軍は奄美大島のカトリック弾圧を実行に移します。神社参拝拒否を繰り返す大島高女、秘密裏に進めていた奄美要塞建設で目障りになっていた外国人宣教師、彼らに協力するカトリック信徒を国防思想普及という名の下で排撃したのです。

33年9月、名瀬町議会議長名で「大島高女認可取り消しを求める意見書」が出され、12月カトリック経営の大島高女が廃校となります。

34年10月、陸軍大島要塞司令官蔵次らが国防思想普及講演会を各地で開き、住民を煽って外国人宣教師を追放する請願書署名運動を展開。12月に宣教師全員が島外追放となりました。(沖繩は1936年に外国人宣教師島外退去)

11月、軍部主導で開かれた名瀬町民大会でカトリック信徒の強制転向(棄教)の決議文が出されます。そこに「本決議の趣旨に違反する者は非国民とみなす」とあります。ここに、陸軍主導による日本型ファシズム(強制的画一化)が現れたのです。^(注3) この決議に沿って信徒は転向を強いられました。奄美から教皇大使館に打電された文書にその緊迫した状況が語られています。

「背教する可、殉教する可二者の内一を取れと云ふ意味の(司令官)の講演でした」「(区長に)非常時の今日背教する事を司令官、角和少佐殿の前にて誓へ、然らざれば殺すぞと迫られ…」「何時殺されるか分りません、是が最後になるかも知りません、命があれば、また状況報告ませう」(外務省外交資料から)

3500の信徒の内3000名以上が転向届を出させられました。その後も教会、信徒宅への迫害が続きました。

奄美のカトリック排撃運動の衝撃は日本のみならず、海外にも広がっていました。しかし、マレラ教皇大使はこの

事件を対外的に公表せず、国際問題化することを避けました。奄美の信徒の靈的善益のために日本人司祭派遣許可を外務省に再三願いますが、軍部、外務省がそれを認めることはありませんでした。

カトリック教会の萎縮と屈服

35年2月、佐世保教会は「要望書」を教皇使節あてに提出します。奄美への邦人司祭派遣、神社参拝、愛国精神の發揮を要望します。佐世保には要塞(現米海軍基地)があり、奄美の次は佐世保と恐れられたでしょう。

同日、奄美の迫害と国内情勢から早坂長崎司教は「訓令」を発表し、信徒に神社参拝、国防思想普及への積極的協力、国旗掲揚などを指示します。この「訓令」が5月には「全日本教区長共同教書」となります。もちろんローマ法王庁の指導に基づいていました。当時の新聞は「唯一神を破って日本のカトリック教へ 大改革の指令を発す」と報道しています。36年6月、布教聖省は「祖国に対する信者の務め」を発表し、「教書」への根拠を与えました。

軍部による上智、奄美への弾圧によって、司教団は萎縮し、屈服し、従来の教えを曲げたのです。その萎縮はカトリックにとどまらず、国民の間に広く伝染していきます。そして積極的な戦争協力の道を歩み始めたのです。

今…

敗戦後、憲法20条が制定され、信教の自由が保障されました。しかし今、かつての「国防」は形を変え「領土問題」となり、それを利用して現政権は日米同盟を強調し、米軍・自衛隊基地増強を図り、憲法9条を変えようとしています。今年8月3日、愛知の芸術祭で実行委員会(会長県知事)は元従軍慰安婦を象徴する作品「平和の少女像」の展示を中止しました。日韓の政治的関係が悪化している中、展示に対する脅迫が多数あり、名古屋市長は展示の中止を要請し、菅官房長官は補助金のカットをにおわせました。政府の政策、宣伝に民衆が簡単に煽られ、脅迫にまで及ぶ事態は日本型ファシズムを想起させます。

萎縮し、黙していれば再び戦争協力の道に足を踏み入れることにならないでしょうか？ いま、カトリック教会に覚悟が問われています。

(平和委員会 谷大二 名誉司教)

(注1) 谷大二 須崎慎一「奄美でカトリック排撃運動はなぜ起こったのか？」日本正平協2014

(注2) 「陸軍現役将校学校配属令」(1925)で軍事教練を受けた大学卒業生に徴兵猶予、幹部候補の特権が与えられました。配属将校引き上げによりこの特権はく奪されます。結果、就職内定取り消し、大学受験生の激減が起りました。

(注3) 須崎慎一「日本ファシズムとその時代」大槻書店1998

本稿は7月28日に開催された平和委員会例会での講演を推敲したものです。

那覇教区平和委員会

日時：9月22日(日) 午後2時〜4時

場所：カトリック安里教会

講師：松堂 秀樹氏 (琉球新報記者)
コザ教会松堂康子さんの御子息 (次男)

演題：「復帰から47年〜沖繩の今〜」

カトリック那覇教区平和委員会

問い合わせ ☎090-1949-6569 (稲福)

9月例会

教室 池坊いけばな 椿ちゃんの部屋

沖繩市与儀、ファミリーマートサミット比屋根店近く

月曜日4時〜6時 約1時間

月謝：4,000円/3回(花材費別 1,000円程度)

連絡先：090-4471-1288(松田香翠)





会でもこの目標について分かち合うつもりですので、よろしくお願いいたします。

八月十一日は与那原教会、八月二十五日には首里教会で司教訪問が行われた。司教が年頭で述べられた趣旨に応じて、積極的な分ち合いが行われたようである。司祭会議の席でも、小教区としてそれぞれが取り組んでいることで、司教が一緒しても良いような取組みがあれば、それらにも参加させていただきと司教は述べられていた。信徒も共に積極的に教会と係わり合い、共に成長、発展していけるよう、新たな課題が与えられているように思う。

(広報委員会 新田選)

洗礼おめでとうございます

開南教会 (七月二十八日)

フランシスカ 下地レイミ

Book

**カトリック文化センター
棚卸しに伴う臨時休業の
お知らせ**

九月三十日(月)～十月一日(火)の二日間文化センターは休業となります。ご迷惑をおかけしますが、宜しくお願ひ申し上げます。

〒900-0055 那覇市天久一八七
電話 Fax 〇九八・八六八・四六四九



NPO 法人ぶどう園の会

訪問看護ステーションクララ

TEL&FAX:098-937-5001

住所 沖縄市泡瀬2丁目37-15

- ・基本受付 月曜日～金曜日(申込、相談など)
- ・営業時間 8:30～17:30
- ・営業日 24時間365日(緊急対応含む)

「パードレ・ピオの集い」開催

日 時：2019年9月16日(月) 午前10時～午後2時

場 所：カトリック普天間教会

指導司祭：ペトロ・ヴォン・エッセン神父(カプチン会)
弁当持参(当日20個くらい弁当の準備ができます)

連絡係：屋宜留美子(石川教会) 090-6857-7321
比嘉須賀子(首里教会) 070-5813-2557

**葬祭の
「やすらい企画」**

私たちは故人とご遺族の意向を最優先に考えます。何でもご相談下さい。

那覇市首里鳥掘町4-57-3
TEL&FAX:098-885-8205
<http://w1.nirai.ne.jp/yasurai>
E-mail:yasurai@nirai.ne.jp

**24時間
受付**

～ご遺族の心をもって奉仕する～
そうてんしゃ

葬 典 社

- *創業30数余年・・・。
- *皆様に支えられ「感謝」とともに人生を閉じるためのお手伝いをさせていただいております。
- *ご質問、ご相談、24時間、いつでもお電話下さい。

「ゆうなの会」会員募集中です。

ひが たかしげ
(実務担当) 比嘉 高茂

**24時間
受付**

てんごく
☎098-853-1059